

名城同窓会ニュース

名城大学附属高等学校同窓会 〒453-0031 名古屋市中村区新富町1-3-16 TEL (052) 481-7436

令和5年3月1日発行

第47号

発行者 後藤 健太郎

次世代リーダー講座

～心に響く同窓生からのメッセージ～

目次

●ご挨拶	2
●同窓会役員(第17期)紹介	3
◆トピックス(行事)	
同窓会文化講演会	4
名城オリンピック	5
芸術鑑賞会と文化祭	5
◆トピックス(教育)	
第1回「探究Day」開催	6
SSH生徒研究発表会	6
次世代リーダー講座	7
◆地域で活躍	
総合学科 特別支援学級と収穫祭	8
吹奏楽部 ナゴヤ防災サミット	8
自然科学部 庄内川での活動	8
◆部活動等報告	
ダンス部	9
陸上競技部	9
スキー部	10
ウエイトリフティング部	10
体操競技部	11
フィギュアスケート	11
●退任教諭紹介	12
●物故者	12
●名城大学附属高等学校ゆかりの物品	13
●学校法人名城大学への募金・寄付について	13
●令和4年度事業報告	14
●令和4年度収支決算	14
●令和5年度事業計画	14
●令和5年度収支予算	14



ご挨拶

名城大学附属高等学校同窓会
会長 後藤 健太郎

会員の皆さま方におかれましては、平素より同窓会活動にご支援を賜りまして、誠にありがとうございます。また、今年度、新規に同窓会へ入会されました卒業生の皆さま、ご卒業おめでとうございます。

卒業生の皆さまにおかれましては、数年前から続いております新型コロナウイルスの影響で、在学中の3年間は、とても大変な時間を過ごされたと思います。

その一方で、附属高校の教育目的である「知・徳・体」の調和する人格教育に重きを置き、穏健中正で実行力に富み、国家、社会の信頼に値する人材を育成すること、教育方針として掲げている、礼節を重んじ、主体的な行動力を養い、多様な経験を積むことにおいて、学習活動・部活動等の文武両面で励んでいただいたと思います。

4万9千名を超える同窓生の一員として、今後の皆さまのご活躍に期待をしております。そして、大学生、社会人として大いに飛躍していただくことを祈念いたします。

さて、同窓会活動も未だに新型コロナウイルスの影響で制限を余儀なくされ、例年開催をしていましたイベントなども思うようにできておりませんでした。私たち同窓会役員一同は、感染拡大防止を十分に心掛けて、できる限りの活動をして参りました。

2026年には、開学100周年記念事業が控えております。この事業の実現と成功に導くためには、一人でも多くの卒業生のご理解とご協力が必要不可欠です。そこで、この事業や会員増強と同窓生の絆を深めるための数々の行事を企画・運営するために広報を担う委員会を設置し、委員の募集を始めております。

ぜひとも、これを機に同窓会事業への積極的なご参加をお待ちしております。また、ご友人や知人で附属高校の卒業生がいらっしゃれば、お声がけも併せて、お願いできれば幸いです。

最後になりますが、名城大学附属高等学校と同窓会の益々の発展のため、同窓会役員一同、努めて参りますので、今後も末永く、会員の皆さま方のご支援を賜りますよう、何卒、よろしくお願い申し上げます。

同窓会役員(第17期)紹介

令和4年4月1日から、次のとおり、第17期の同窓会役員が、選任されました。
任期は令和6年3月31日までとなります。

【第17期 同窓会役員名簿】

役 職 名	氏 名
会 長	後 藤 健 太 郎
副 会 長	日 置 慎 二
副 会 長	福 江 美 智 子
監 査	近 藤 千 春
監 査	紀 平 知 大
書 記	鎌 田 直 洋
書 記	鈴 木 礼 治
学内幹事(会計)	安 藤 真 依
学内幹事(庶務)	藤 原 和 人
名誉会長	中 島 健
名誉会長	武 村 學
名誉顧問	伊 藤 憲 人
顧 問	角 野 伸 一
顧 問	岡 充 彦
顧 問	米 原 次 穂
顧 問	杉 山 豊 美



後藤会長



日置副会長



福江副会長



近藤監査



紀平監査



鎌田書記



鈴木書記

同窓会文化講演会

2月19日、同窓会文化講演会をドイツからのLIVE配信にて開催しました。

講師は、2001年3月普通科の卒業生で、ドイツ・デュッセルドルフで設立されたライフスタイルブランド「suzusan」の代表取締役 CEO 兼クリエイティブディレクターである村瀬弘行氏。講演では「手元にある価値の転換」をテーマに、ご自身の経験談を語られました。

まず村瀬氏は、進学先であるドイツ・デュッセルドルフにある大学での体験を語られました。「日本の大学と違い、そこは成績がつくこともなく、教授は対等な目線で接してくれて、教授が正しいとは思っていない。自分がやりたいことをやって、卒業しますと言わなければ何年いてもいい大学だ」と話され、その大学には6年半通い、そこで自主性、自分の中から何かを生み出す力を身につけられたそうです。

次に、現在展開している事業について説明されました。村瀬氏のお父様は400年の伝統を持つ有松鳴海絞りを製作しており、お父様がイギリスの展示会に出展した際、「どうやって作ったの？これは何？」という海外の方の反応が新鮮で、有松絞りに可能性を感じたそうです。これを機に学生時代に経営を学んでいたルームメイトと、大学在学中の村瀬氏の二人で2008年に会社suzusanを設立。現在「昔から販売されてきた絞りの浴衣をそのまま売るのはなく、欧州の消費者の生活の中で生きる日本の伝統工芸」をコンセプトに、オリジナルのストールや照明を販売し、様々な方からsuzusanの有松絞りの商品が所望されるようになってきたと語られました。



名城オリンピック

6月22日～24日、新型コロナウイルスの感染対策は徹底しながらも、何とか本来の名城オリンピックの規模・内容に近づけることができるようにと考えられ、名城オリンピックは、本来の種目をすべて実施・実現することができました。

同窓会では、名城オリンピックで汗を流す生徒たちを応援するため、恒例となっている熱中症対策用のドリンクとして、今年は麦茶を在校生全員へ贈呈いたしました。

【名城オリンピック結果】

総合優勝 3A3

総合準優勝 2A4

総合3位 2S1



*右の写真は、附属高校写真部が撮影したものです



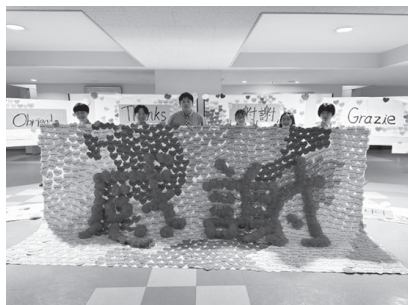
芸術鑑賞会と文化祭

10月5日に芸術鑑賞会、10月6日、7日に文化祭が開催されました。芸術鑑賞会は、コロナ禍による中止が相次ぎ、3年ぶりの開催となったため、今年の3年生にとっては、初めて参加する学校行事となりました。以前は90分公演を二部制で実施していましたが、コロナ対策として、60分公演を三部入れ替え制で開催し、「音楽ダンスアクロバット」を鑑賞しました。



令和4年度の文化祭のテーマは「感謝」。食品バザーを除けば、各クラスのやりたいことを実現することができ、外来者の招待も保護者のみ可能となりました。生徒会では、生徒たちが書いた感謝のメッセージを一つ一つ集めて、

感謝の言葉を伝える企画を実施。同窓会企画「高校の歴史をたどるパネル展示」も、3年ぶりに出展することができました。



第1回「探究Day」開催



3月2日、10日の2日間、1・2年生全校生徒が参加する「探究Day」が開催されました。探究の名城を掲げる附属高校では、全クラスで探究的な授業が展開されています。1年間通じて行ってきた探究的な学習を生かし、全校生徒が学年、クラスの枠を越えてグループを作り、2日間かけて社会課題、SDGsの目標11「住み続けられるまちづくりを」について課題解決策を議論し、発表を行いました。グループ活動のスタート時は知らない生徒同士の活動で戸惑いも見られましたが、次第にディスカッションも活発になりました。新型コロナウイルス対策による日程変更等もあった中、生徒実行委員が主体的に取り組みよく準備した結果、ほとんどのグループで解決策をまとめ発表することができました。今年も、第2回「探究Day」を実施します。乞うご期待！



SSH生徒研究発表会

8月3日、4日の2日間、神戸国際展示場において全国からスーパーサイエンスハイスクール指定校および指定経験のある学校200校以上が集い、令和4年度スーパーサイエンスハイスクール生徒研究発表会が開催されました。

附属高校からは、「ミカンで作る健康コーヒー」というテーマで普通科スーパーサイエンスクラス3年生の堀田遥生さん、2年生の加藤彩良咲さん、小島久実さんが発表を行いました。堀田さんを中心にSSラボの授業や授業後に、試行錯誤を繰り返し真摯に研究に向き合ってきました。

新型コロナウイルス感染症の影響で参加数に制限がありコロナ禍前より少ない参加者ではありましたが、発表会当日は同年代同士で刺激し合い、他校の生徒と白熱した議論を合おう姿が見られました。自身の研究を一層発展させる糸口と意欲を得られた発表会に参加できたことは良い経験になったことと思います。



次世代リーダー講座



10月27日授業後、次世代リーダー講座が開催されました。講師の塚本将弘氏は附属高校普通科一般進学クラスの卒業生で、岐阜大学卒業後、留学生の就職をサポートする株式会社 Harmony For を起業されています。

講座では、研究者を目指していた自分が、何故起業するに至ったのか、起業を目指す中で参考になったU理論などの考え方について語っていただきました。また、やりたいことを見つけるためには、アクションすることが大切であり、気になることがあれば、それが自分のやりたいことかどうかまずは試してみる。「これだ!」と思ったら深めてみる。また、違うと思ったら視野を広

げてまた気になることを探して試してみることが大切であるとのメッセージをいただきました。参加した生徒たちにとっては、先輩から聞く起業のこと、留学生との関わりなど大変有意義な時間となりました。

12月1日に開催された次世代リーダー講座では、講師として附属高校普通科国際クラスの卒業生で、現在革職人として活躍されている高桑宏介氏をお招きしました。

前半は、卒業当時の担任であった羽石優子先生との対談形式で、3つのターニングポイントについて語っていただきました。高校時代、テレビで取材された学校近くの革職人に弟子入りをして腕を磨いた話、国際クラスならではの課題に追われながらもニュージーランドのホームステイを大いに楽しんだ話、大学時代に何もコネクションがない状態でイタリアに渡って、遠回りしながらも希望通り革の工房につながりを持つことができた話…淡々と話されていましたが、一つ一つに大きなドラマを感じるものでした。講演では仕事で扱う革のワークショップも開かれ、普段見たことがない革に、生徒たちは大いに盛り上がりました。

後半では、「会いたい人に会う為に必要な資質」と題して、人とのつながりの大切さを語られました。高桑氏には、少年時代から憧れていた所ジョージさんから直接仕事を依頼されるという、普通では考えられないことがありました。しかしそれは偶然ではなく、高桑氏が「ちゃんとした形で会いたい、ファンとしてではなく、自分の強みを生かして会いたい」という気持ちを持ち続け、「応援される人柄であり、平均値を外れた特徴を持っていた」からこそ、憧れの人と関わる事ができたのです。「これは関係ない、と決断してしまうと、そのレベルで止まってしまう」「どんなに気が合わない人であっても、相手に対して愛を持って接するということが大切だ」高桑氏の経験から出る言葉は、高校生の心に響くものでした。



特別支援学級(日比津小学校)との収穫祭

10月20日、地域の小学生と校内の畑で育てたサツマイモの収穫祭を実施しました。

総合学科地域交流系列の畑班が中心となり企画し、交流し実施しました。

今年の3年生が代々引き継がれてきた地域交流系列の「畑」を4年ぶりに復活させてくれました。今年は、コメダ珈琲店から抽出後のコーヒー豆をいただき、肥料として利用しました。SDGsを意識した取り組みで今後も続けていきたいと考えています。

例年は、地域の町内会の方と一緒に育て、収穫していましたが、コロナ禍の影響で交流が途絶えており、また、生徒たちの意向もあり、特別支援学級の児童と収穫することになりました。夏休みの水やりをさぼりがちになったり、収穫直前には、葉が虫食いのため穴だらけになったりと不安が高まりましたが、当日は、4年前より大きく立派なサツマイモをたくさん収穫することができ、生徒も満足して有意義な一日を過ごすことができました。



吹奏楽部 ナゴヤ防災サミットでの演奏



11月3日文化の日に、吹奏楽部が金山総合駅南口広場で行われたナゴヤ防災サミットに参加しました。これは、名古屋市を中心に防災を身近に感じてもらうためのイベントです。このイベントには、附属高校卒業生である堀田雄介氏の紹介で参加することができました。

また、写真は同じく卒業生の盛川振一郎氏に撮影いただきました。多くのOB・OGの皆さんに支えられて活動することができています。

自然科学部 庄内川での活動

附属高校の北を流れる庄内川は国土交通省が管理する一級河川です。古くは漁業が行われてきた豊かな川でしたが、窯業の影響や工業排水の影響により、全国一級河川の中でもワースト10に入るほどの汚れた川になっていました。近年は改善傾向にありますが、それでもまだ水質ランクは低いままです。この現状を受け、地域団体である「矢田・庄内川をきれいにする会」の方から指導を受けながら、自然科学部は月に一度の川の調査を行っています。

また、年に一度の砂州の清掃活動では清須市と連携したり、朝市イベントでブース出展をして地域の方々へその活動を知っていただいたりする取組を続けています。



全国大会等に出場した部活動等報告

ダンス部

◆全国高等学校ダンスドリル選手権大会2022 団体（Jazz部門ラージ編成）優勝
個人（ミスダンスドリルチーム部門）優勝（山中麻紘）

『最後の夏の約束』

総合学科3年 渡邊 百彩

私はダンス部での2年半、本当に多くのことを学びました。入部した当初は、先輩方の背中についていくのに必死でした。練習では限られた時間の中でキャプテンがメニューを考え、さらに、私たち後輩に技や演技のアドバイスをしてくださりました。中学校では経験したことのない厳しさに戸惑うこともありましたが、自分が先輩になって、初めてその偉大さを実感し、今でも私の憧れであり、尊敬する存在です。

2年生からはキャプテンを務めるようになり、どのような練習をすればチームとしてレベルが上がり、どのようなキャプテンであればいいか、と思ってもらえるのか、練習が終わる度に考えました。そして、いつでも明るく、誰よりも大きな声を出して練習に取り組むこと。学校生活でもキャプテンとして自覚を持ち、模範となれる人であること。この2つを守ろうと心に決めて、毎日を過ごしました。

3年生になってからは、部員が60名を超え、全体に目を配ることが大変でしたが、ダンス部に入りたいと思ってくれている子が多くいることが、何よりも嬉しかったです。そして、私たちの引退試合となる夏の大会では、全国大会出場への切符を手にすることができました。1・2年生の頃はできなかった有観客での開催が決まり、楽しみが二倍となりました。大会が近づくにつれ、熱量が増していくのとは反対に、コロナの影響で出場できなくなったらどうしよう、という不安も募っていきました。最後の大会に至るまでには、会場で踊ることができず、ビデオ審査での出場となったり、開催していても、感染者が出てしまい辞退するといったことが続き、誰も悪くないからこそ、悔しさを受け止めることしかできない日々を送ってきました。最後の大会こそ、私たちの夢であり、約束でした。

結果は、メンバー全員で大会に出場することができ、全国優勝を果たすことができました。今までにないほど、心から嬉しかったです。このような結果を残すことができたのは、陰で支えてくださった顧問の先生をはじめとする、多くの先生方のおかげです。顧問の先生の言葉の中で、「一人でも欠けていたら作品にならない」という言葉が強く印象に残っていますが、ダンスとは、仲間がいなければ踊れないこと。仲間がいたから素敵な結果を残せたこと。全員が、欠けてはならない、必要な存在の一人なんだということ、この経験の中から学びました。

ここには書ききることができないほどの大切な思い出を作ることができたダンス部という場所、そして、共に過ごした仲間たちに、心から感謝しています。ありがとうございました。



陸上競技部

- ◆令和4年度全国高等学校総合体育大会 出場 100mハードル（坂口由花）、走幅跳（森部 諒）
- ◆U16・18・20日本陸上競技選手権大会 U16三段跳8位（中村光希）
出場 走幅跳（森部 諒）、三段跳（渡辺実優花、中村光希）、300mハードル（上村空夢）、100mハードル（坂口由花）
- ◆第77回国民体育大会 出場 走幅跳（森部 諒）

『仲間との絆』



総合学科3年 石川 紗衣

高校1年生の時に1600mリレーで全国大会に参加し、その場の空気感や競技場の大きさに圧倒されたのを今でも覚えています。そして私もこの舞台で勝負したいと思いました。1年生では記録が伸び悩んだり、焦りと不安を感じることもたくさんありました。しかし、2年生で自己ベストを大幅に更新することができ、冬季練習の大切さを知りました。陸上を続けてきて辛いこともありましたが、それでも、頑張っただけのことは、一緒に練習をしてくれる仲間や先生のおかげです。3年生になり周りが引退し、一人で練習するようになり、よりいっそう仲間の大切さを実感しました。3年間支えてくださった先生にも本当に感謝しています。大学でもたくさんの出会いや仲間を大切にしたい、またいつも親身になって支えてくれる家族や先生方に恩返しができるように頑張っていきたいです。名城大学附属高等学校陸上競技部で本当に良かったです。

総合学科3年 坂口 由花

私は1年生の冬に怪我をしてしまい、数か月は走れなかったり、復帰した後も思うように記録が伸びない時期がありました。たくさんの人のおかげで乗り越えることができ、3年生では全国高校総体やU20日本陸上選手権にも出場することができました。一緒に目標に向かって練習をしてくれた仲間、いつも熱心に指導してくれた先生、いつも応援してくれ支えてくれる家族に感謝の気持ちでいっぱいです。どんな時でも笑顔の絶えない名城大学附属高等学校陸上競技部で素敵な人たちと出会い、3年間頑張ることができて本当に幸せです。ありがとうございました。

スキー部

- ◆令和3年度全国高等学校総合体育大会 出場
(鈴木想助、川畑広翼、加藤 綾、江嶋祐衣、竹林空良、瀬川捺稀、石黒太誠、久田子寧)
◆第76回国民体育大会 出場(鈴木想助)

『感謝』



普通科3年 鈴木 想助

スキー部は斜面を滑り降りていく疾走感が特徴のアルペンスキーと平地や丘などのアップダウンのある長距離のコースを走るクロスカントリースキーの2種類の競技で活動しています。

私は選手として約2年間クロスカントリースキー競技をして、様々な経験をしました。オフシーズンにはひたすら身体作りをし、その中で登山やアイススケートなどスキーに間接的につながるような練習もしました。

シーズンインとなる冬休みは大晦日と正月しかオフがなく、それ以外は雪山に籠って練習を重ねていきました。雪上にいられるのは合宿・大会合わせてシーズンを通して、たったの30日くらい。顧問の白戸先生は「たくさん滑ったもん勝ちや」と仰っており、私はその言葉を信じ時間があれば滑るようにして、朝5時半過ぎから薄暗い中滑ったり1日40キロの距離を滑ったり努力を重ねました。とても過酷な競技で寒い、辛い、きついと何度も思いましたが、何故か滑りたいと思う気持ちの方が強く、気づいたらクロスカントリースキーに夢中になっていました。「10キロという距離を体力を限界まで使い果たし、ゴールした直後に雪に向かって倒れ込む」この瞬間が私にとってとてつもない達成感が感じられ、この競技の醍醐味だと思います。

2年間で3回も指骨折を経験し、時には「もうだめだ」と思った時もありましたが、互いに高め合える仲間がいて練習を重ねることができ、インターハイと国体の出場を決めることができました。

本戦ではインターハイは学校代表、国体は愛知県代表としてのプレッシャーを感じて、すごく緊張しましたが、家族や顧問の先生、部活動の仲間やクラスのみんなから応援してもらい、悔しい結果にはなったけれどやり切ることができ、貴重な経験をすることができました。

最後になりますが、こんなに私が心身共に成長できたくさん貴重な経験ができたのは、家族や先生方、コーチ、行先で出会った方々、部活動の仲間などが応援し支えてくれたおかげです。とても充実し、幸せな高校生活でした。本当にありがとうございました。

ウエイト
リフティング部

- ◆令和4年度全国高等学校総合体育大会 出場 男子55kg級(福井涼太)、61kg級(森下垂依人)、73kg級(杉本澤音)
女子55kg級(坂本和琴)、59kg級(永井暖乃)
◆第77回国民体育大会 出場 男子55kg級(福井涼太)

『積み上げてきたもの』

総合学科3年 福井 涼太

私がウエイトリフティングを始めたきっかけは、先輩からの勧誘でした。当初、スポーツを行うことに少し抵抗を感じており、「大会で良い結果を出したい」といった曖昧な目標のまま、勧誘の流れで入部しました。しかし、練習していく中で、努力するほど記録に結びつく楽しさを知り、目標が「全国大会で入賞したい」と思いました。

目標に向け練習していた際、肩甲骨あたりに痛みを感じるがありました。そして、我慢して練習し続け、疲労骨折をしてしまいました。骨折後軽く筋トレをしていたらさらに悪化してトレーニングができなくなり、部活動を休部しました。そのため、2年生の夏の全国大会に出場することができず悔しい思いをしました。それでも諦めず、復帰後冬の全国選抜大会出場に向け、遅れを取り戻そうと必死に練習した結果、2度目の骨折をしました。目標だった全国大会にも出場することができず、もし骨折が治ったとしても来年の全国大会に間に合うかわからない中、絶望して退部しようと考えていました。

中学の時、部活動で毎日のように練習してもあまり上達せず、周りとの差が開いていき、監督からのちょっとした体罰を受け、病気になり退部したことがあります。また中学と同じでダメなのかと考えていたところ、顧問の先生が何度も退部を引き留めてくださり2度目の復帰をしました。復帰後、今まで以上に筋肉の動きやトレーニング方法を研究することによって、目標の全国大会と国民体育大会に出場することができました。

「積み上げてきたもの」それは怪我や病気あるいは人間関係などによって簡単に崩れさってしまいます。しかし、1度積み上げた経験や知識は、必ず次に繋がると思います。また、崩れてしまっても以前のものにプラスアルファを加え、強固にすることでより高く、より強く積み上げることができるということを私はウエイトリフティングを通じて学びました。この経験を生かし、大学でも頑張ろうと思います。

最後になりますが、ここまで支えてくださった山中先生や原田先生をはじめ、ウエイトリフティングに関わった方々に感謝します。3年間ありがとうございました。



体操競技部

◆令和4年度全国高等学校総合体育大会 団体出場（大野暖人、中村貫太、藤木大智、垣内皓成）
個人出場（山下蒼斗、馬場慧朗）

『諦めない心のその先に』

総合学科3年 垣内 皓成



名城大学附属高等学校体操競技部には「インターハイ団体8位入賞」という目標があります。全国大会での入賞という高い目標を聞き、この環境で強い選手になりたいという思いが高まりました。名城大学附属高等学校が目指す「丁寧で正確かつ美しい体操」そして「失敗しない体操」を作り上げるために様々な練習をしてきました。

そんな中、僕が最も成長する切っ掛けとなったのは左膝を怪我したことです。高校1年生の3月と高校3年生の7月に前十字靭帯損傷という怪我をしてしまいました。通常全治1年以上を要する怪我で、1回目の時は、まだ3年生の夏までに回復する期間が見込めたのですが、2回目は高校最後のインターハイの2週間前で、日常生活を送ることも困難な状態でした。1回目の怪我からリハビリや治療など、自分の中で最

善を尽くしてきましたが、積み上げてきたことが全て崩れてしまったような気がして、何も考えられませんでした。そんな時、顧問の西村先生から「お前はもう諦めたのか？先生は諦めてないぞ」と言われました。ここで諦めてしまうことが、今までの全てを崩してしまうと思い、この言葉から諦めかけた心にもう1度前に進む勇気をもらいました。インターハイの決勝では6種目中1種目のみの出場になりましたが、その時に出せる自分の力を最大限に発揮できました。最後まで諦めずにやり切ることの難しさ、逆境を乗り越えた先にある達成感、これらを知れたことは僕の財産です。

技の指導だけでなく、たくさんのことを教えてくださった西村先生、副顧問の堀尾先生、辛い練習と一緒に乗り越えた仲間、いつも支えてくれた家族など、周りの人に助けってもらって競技力だけでなく人として成長できた3年間でした。この名城大学附属高等学校体操競技部で活動することができて本当に良かったです。ありがとうございました。

フィギュアスケート

◆令和3年度全国高等学校総合体育大会 出場（小林舞音）

『続けることの大切さ』

総合学科3年 小林 舞音

私がスケートを始めたのは、小学2年生でした。小さい頃は楽しいスケートでしたが、選手としてジャンプやスピンの技術を習得しなくてはならない時期になると、練習時間も多くなり、スケート中心の生活になりました。

ジャンプが跳べるようになると嬉しくて、夢中になって練習をするようになりました。しかし、ジャンプの難易度が高くなるにつれて体への負担も大きくなりケガをして練習できない時期もありました。そういう時期がある度やめたいと思うこともありました。

スケートは、ジャンプやスピン、表現力やスケーティングなど点数評価される部分が多くあります。スケートを見ている人はジャンプに注目しがちですが、ジャンプ以外の部分でも点数を伸ばすことができると続けていくにつれて私はジャンプ以外の技の大切さに気づいていきました。私はこの時に続けてきたから気づけたんだと思いました。スケートは、ケガをしやすいし続けることがあまり簡単ではないスポーツです。そんなスケートをここまで続けられたことは自分自身への大きな自信となり、インターハイ出場という目に見える結果として現れました。私は本当に続けてきて良かったと思ったのと共に、続けるために支え続けてくれている両親、教えてくれる先生方、一緒に頑張っている仲間など様々な人のおかげで今の自分がいるのだと改めて感じました。そんな人たちや、この環境に感謝しかないです。この気持ちを忘れずにこれからも頑張っていこうと思います。



退任教諭(令和5年3月末)紹介



かねこ けいいち
金子 恵一
(保健体育)

昭和56年4月～在職

中学1年生の時にテレビの青春番組を見て、衝撃を受けました。それは、教師が主人公の学園ドラマでした。勿論、架空の人物なのですが、どこかに必ずいると思い、翌日、当時の担任に聞いてみました。「この先生は何処にいますか?」と。すると担任は、「君はバカじゃないか? そんな先生はいない!」と一蹴されました。テレビドラマの話でしたので何となく分かってはいたものの、いないならば自分がなってやると、その時に誓いました。それが教師を目指す切っ掛けでした。

父から、「文武両道(座右の銘)」と書いた色紙をもらい、机の上に掲げて、勉強と柔道の修行に明け暮れました。念願が叶い、名城大学附属高等学校の保健体育科の教師となり、教育実習で生徒からプレゼントされた色紙の中に記された「早く本物の先生になってね!」を胸に刻み、邁進してきました。

これからは、人生第3章の始まりです。皆さん本当にありがとうございました。

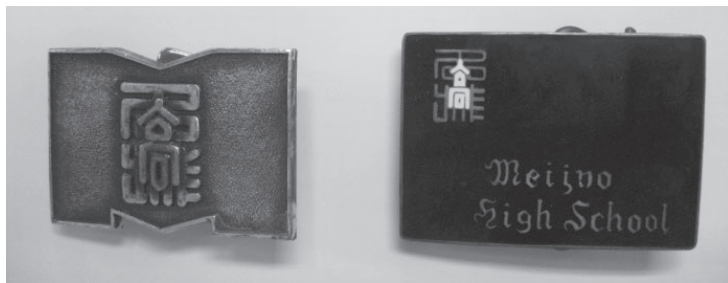
物 故 者(令和4年1月～12月)

ここに謹んで哀悼の意を表しますと共に、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

氏 名	逝去年月日	享 年	教 科	在 職 期 間
螺澤 利昭	令和4年8月10日	94歳	理科	昭和25年4月～平成7年3月 (教 頭在任:平成3年4月～平成5年3月) (副校長在任:平成5年4月～平成7年3月)
杉山 伸哉	令和4年8月30日	81歳	保健体育	昭和39年4月～平成21年3月 (教 頭在任:平成11年4月～平成14年5月) (副校長在任:平成14年6月～平成15年3月) (校 長在任:平成15年4月～平成21年3月)

「名城大学附属高等学校ゆかりの物品」寄贈のお願い

同窓会事務局では、令和8年の開学100周年に向け本校ゆかりの物品の収集を始めました。ご家庭の押入れ等で眠っている附属高校ゆかりの物品がありましたら、ぜひお知らせください。



◀写真は、諏訪宏和先生(第13回生 昭和36年3月機械科卒業 平成16年3月退職)から寄贈いただいた卒業記念品のベルト用バックルです。

写真左は1962年のもの、右は1959年定時制のものです。

学校法人名城大学への募金・寄付について

学校法人名城大学では、2026年に開学100周年の節目を迎えるにあたり、次の100年に向けて、「中部から世界へ 創造型実学の名城大学」という将来ビジョンを策定しました。それに伴い、開学100周年事業(大学における全学共用棟新築・国際化の推進等)を実現させるため、「名城大学開学100周年記念募金」を始めました。

皆さまには、未来を担う生徒・学生たちのために、何卒力強いご支援を賜りますようお願い申し上げます。

名城大学開学100周年特設サイト
<https://www.meijo-u.ac.jp/100th/>



■名城大学開学100周年記念募金

<https://www.meijo-gift.com>

2023年4月から返礼品付き寄付サイト「名城ギフト」を開始予定。

寄付金額に応じて返礼品を選ぶことができます。また、名城大学オリジナルグッズも準備する予定です。



■学校法人名城大学教育振興資金～名城サポーターズ募金～

<https://www.meijo-u.ac.jp/about/fund/fund01/index.html>

名城大学附属高等学校へご支援くださる場合は、使い道の中から「附属高等学校の教育活動充実」をお選びください。



【お問合せ先】名城大学渉外部渉外課 TEL: 052-838-2066 MAIL: ookouyu@ccml.meijo-u.ac.jp

同窓生
(サポーター)として

附属高校の
生徒達の
『夢』

応援してみませんか